

巻頭随想

「日本百名山 鳥海山に登る」

一般社団法人大阪能率協会事業本部長
アジア・中国事業部 常任顧問
新日本コンピュータマネジメント株式会社
代表取締役

神保 敦



鳥海山は、またの名を出羽富士とも呼ばれ、雄大な山裾を秋田県と山形県にまたがって延ばす泰然とした秀峰である。

7月8日の朝の7時、標高1173mの祓川登山口から竜ヶ原湿原を抜けて、いよいよ登山を開始した。今年は残雪が多く雪渓が連なり、夏道はほとんど見えない。6爪アイゼンを装着し、鳥海山を正面に大雪路へ登ってゆく。緩斜面のあと、急斜面の雪渓を二つ登りきると、灌木の中に七ッ釜避難小屋が見える。雪解けが遅く、七ッ釜とよばれる湿地帯は雪で埋まり、ヒナザクラの群生などお花畑は見られない。ここからのルートは、大雪路、かなりきつい、しだいに高度を上げていく。氷の薬師付近は沢が狭く岩が多く露出しており、一旦休憩することにした。

氷の薬師を過ぎるとようやく雪渓が終わり、ここから鳥海山の山頂までは、舍利坂とよばれる急な岩礫地の登りが続く。ミヤマキンバイが咲く山道をひたすら上った。



12時半に鳥海山の最高峰、七高山の山頂に立った。東には奥羽山脈、西は鳥海山の大カルデラ、南は庄内平野から月山まで見渡せ、北は、秋田平野と日本海の眺望が素晴らしい。男鹿半島がくっきりと見える。

ところで、「日本百名山」は随筆家の深田久彌が実際に登頂した日本各地の名峰100座を選び1959年から雑誌『山と高原』で自身の

登頂記を毎月二座ずつ紹介し連載を始めた。1963年まで書き継がれたその連載の初回が鳥海山と男体山であった。

深田は百名山選定の基準について、その第一は山の品格である。誰が見ても立派な山だと感嘆するものでなければならない。高さでは合格しても、凡常な山は採らない。厳しさか強さや美しさか、何か人を打ってくるものがない山は採らない。(中略)

第二に、私は山の歴史を尊重する。昔から人間と深い関わりを持った山を除外するわけにはいかない。(中略)おのずから名山は資格を持っている。山霊がこもっている。

第三は、個性のある山である。個性の顕著なものが注目されるのは芸術作品と同様である。その形体であれ、現象であれ、乃至は伝統であれ、他に無く、その山だけが具えている独自のもの、それを私は尊重する。(中略)と後記している。

さて、外輪山の最高峰(2228m)の七高山から、残雪豊富な新山を眺め、岩稜帯を山形県側に下山する。ここからは、外輪山の稜線沿いに行者岳、伏拝岳、文珠岳という三つの山頂が連なり、絶壁から氷河が削った千蛇谷を見下ろしながらの縦走である。天気もよく風も穏やかなので危険を感じることなく一時間ほど歩くと火山岩の脆い足場にハシゴがかかっている。その分岐から急勾配を下ると、再び雪渓となっていたためアイゼンを装着して今度は急斜面を外輪山の反対側に向かって上る。雪化粧の賽の河原やすり鉢状の鳥海湖を左下に見ながら登りきり。太ももの筋肉が痙攣して、時折鋭い痛みが走るけれど、どこにも逃げることはできない。さらに一時間ほど谷筋や灌木の登山道を下りて大平登山口に到着。素晴らしい経験でした。

H29.8.11 山の日(記)